

「触れあう」実習について

—身体表現の授業実践より—

麻生 和江*・村上 智美**・櫛来 祥***・小西 寛之****・首藤 小和*****

【要 旨】 本研究は、芸術表現系の大学生に、創作ダンスに必要なポスト・モダンダンスの中核であるコンタクト・インプロヴィゼーションの第一段階となる「触れあう」を指導した過程と成果を紹介するものである。

文献と体験を基に検討を重ねた指導方法により、履修した大学生は、ダンスの表現方法の重要な要素を体得することができた。

【キーワード】 即興 ポスト・モダンダンス

I はじめに

運動会、体育祭で、フォークダンスを踊る時に、男子と女子が手をつなぐという指示にためらったことがある。麻生は小学生中学年から徐々に他者に触れることを意識しはじめたように記憶している。いつ間にか、異性に限らず同性に対しても「触れる」ことはなるべく避けるという意識を持っていることに気づいた。バレエ鑑賞では、女性が男性にリフトされている場面を見た時、その技への感動より、男性が女性の身体に触れていることを照れくさいと思った。村上(2008)¹⁾による「自分の価値感にかなわない他者への抵抗感」である。麻生がモダンダンスを始めた大学時代以降も、ダンスで作品で触れあうことはあえて要求されず、むしろ回避するよう指導された。同時に人前で大声を出すこと、目立つ行動、オーバーアクションは下品という教えが、麻生の身体には浸透していった。

しかしながら、1995年以降スティーブ・バクストンによるコンタクトインプロヴィゼーション、^{注1)2)} 舞踏家 芦川羊子による「衰弱体」、^{注2)3)} 田中泯によるサムエル・ベケット原作、闇と病を抱えた身体による「ゴドーを待ちながら」の舞踊化、^{注3)} ポストモダンダンスの舞踊家であったルビー・シャング、ケイ・タケイ等による課題の下で行う即興、シモーヌ・フォリティーによる自然を身体で知覚する即興^{注4)} 他、身体の触れあいを含んだ多くのワークショップを受講し、他者に触れる、他者から触れられる、時によっては発声する等の即興を体験する

平成21年10月16日受理

*あそう・かずえ 大分大学教育福祉科学部情報社会文化課程舞踊教育

**むらかみ・ともみ 大分県立佐伯養護学校教諭(臨時)

***くしく・さち 大分市 臨時的任用職員

****こにし・ひろゆき 大分大学大学院教育学研究教科教育専攻保健体育専修

*****しゅとう・さわ 大分大学大学院教育学研究教科教育専攻保健体育専修

うちに、表現という範疇でそれらへの恥ずかしさは消失した。ワークショップでは他者に触れることで他者に刺激を送り、同時に自分も触れられる立場であった。自らの身体はもっと自由であってもよく、表現をする上で、触れあう実習は表現の中核であることを実感した。

教員養成系の学生にこの大切さを伝えたいと思い触れあう実習を試みた結果、「技的要素」には関心を示したが、即興は「変なこと」「恥ずかしい」「何のためか理解できない」「ダンスじゃない」等々の理由で、受け入れの姿勢はみられなかった。

しかしながら芸術表現系の学生への授業では受け入れの姿勢がみられた。自己の体験と、C・V・W・ブルックス（1922）⁴⁾による「センサリー・アウェアネス」を手がかりとして試行錯誤を重ね、2009年4月－7月の受講生17名の、全員の自由記述による授業の感想には、「思わずのめり込んだ」「新しい経験」「他者とのコミュニケーションが深まった」等の記述がみられた。

コンタクトインプロヴィゼーションは、即興の能力のみならず、体操競技のようなしなやかで正確なバランス感覚と強靱な筋力が要求される。ダンスを始めたばかりの大学生に、このような身体的な能力を要求することは困難である。しかしながら、自らの身体を感じ取り、触れあうことから、身体を他者に委ねつつ、即興を持続する能力は創作の基礎として体得してほしい。そのためには、まず、人と人之間にある障壁に気づき、超えていくという課題が要求される。本研究は、人と人之間にある障壁について、文献と体験による類型化を行った上で、この障壁を超えようとする学生の意識変容を把握し集約し「触れる・触れられる」、すなわち「触れあう」に至るまでの意識の変容に焦点化して、指導方法を一般化するための一助となすことを目的とした。

Ⅱ 人と人之間にある障壁について

伊東（1991）⁵⁾は、「対人関係は、ひととひとが『触れあう』ことであり、それは心と心が触れあうことと身体と身体が触れあうことが区別されていない。人間は他者との触れあいを持ちたいし、生きるということはこうした他者との触れあいそのものである。しかし、いろいろな障害が、それを妨げやっかいな人間の問題を引き起こす。人間の悩みの多くは対人関係の持ち方にかかわってくるであろう（麻生要約）」と述べている。

すなわち触れあうということは、人と人の「間」を心身ともに縮め、壁を消失させるということである。この「間」には様々な場面での相違を実感することがある。身近な例として日本人同志の挨拶はお辞儀であるが、欧米人には握手である。日本人同志ではハグ（hug）^{注5)}はしない。「指先で身体を触れる・触れられる」を試みた^{注6)}学生の感想には、触れる人も触れられる人もどこを触れようか、どこを触れられるのかかなり緊張した、このようなことをするのは恥ずかしいという感想が多かった。「日本人はこういう事になれていないから照れる」という国柄の指摘もあった。

国柄による人々の身体境界の体験の仕方について、フィッシャー（1980）⁶⁾は、「信頼性の高い一般法則を引き出すには至らないが、国家としての行動と国民の持つ身体の境界感覚の特徴にはある程度の関連が推測され、平均的な人間の基本的な身体感覚が、国家全体の行動を方向付ける重要な要素となること（麻生要約）」を述べている。また、文化の相違によって身体境界の見方は異なるという説を紹介する中で、食べ物に含まれた他者の唾液を尊ぶ事例をあ

げ、「私の身体」と「あなたの身体」という通常の区別を無視した「身体の共有作用」について述べている。日本では一般的に見られる行為ではなく、人々は大方、直視を避け、拒絶するであろうと思われる。

フィッシャー（1980）⁷⁾は「異なる習慣、人種による見かけの相違、大きな傷痕、欠損や局部的融合、不均衡のある身体に対しては、異質と捉え、不安や攻撃という非理性的な身体不安におそわれる。この感情に対応できるようにならない限り、『差別』は根絶しない」（麻生要約）ことを述べ、「間」を縮め、消失させる上での根本的な障壁を提示している。同様な障壁は障がい者への眼差しにも含まれる。^{注7) 8)}

異性との「間」について、伊東（1991）⁹⁾は、「身体接触については、かなり普遍的に広まっている社会的タブーがあり、それは特に異性間にあつては、性的な関係、あるいは姦淫を意味しているかのような偏見がかなり強い。それは、宗教に根ざしているものであると思われるが、フロイドの精神分析理論もそれに強い影響を与えたのかもしれない。」と述べ、異性間の「間」の特性を説明している。

コンタクト・インプロヴィゼーションを指導するスティーヴ・パクストンは、他者を触れる実習のなかで、性的な感受性や互いのやり取りに神経を向かわせると、相手の存在は動きを生み出すための刺激ではなくなり、ダンス展開やパートナーに危険を与える可能性がある事を警告したと¹⁰⁾されている。

逆に、土方異幡儀大踏鑑をはじめ暗黒舞踏を名乗る舞踊家の作品は、傷痕、不均衡、エロス等、いわゆる「裏文化」を直視した作品を展開した。¹¹⁾ 両者には隠蔽と露呈という正反対のベクトルを感じるが、両者ともに間の障壁への挑戦であったと考えられる。

以上の見解をもとに、人と人の中にある障壁について類型化した。

- ①国、文化のなかで培われた社会的規範。
- ②性的なタブー。
- ③心身の異形、重い病、闇への拒否反応。

Ⅲ 対象者の特徴

本研究の調査対象者は、2009年4月－7月開講 麻生担当の授業「身体感覚の知覚演習」の履修者17名であり、彼らは音楽、美術、身体表現のいずれかの分野を礎として、芸術表現を総合的に学ぶコース所属の大学生である。授業のねらいは「全身の重さ、大きさ、動き方などを感じとることによって、身体が存在を知覚し身体性への認識と知覚能力を高めること」である。ほとんどの学生は創作ダンスの未経験者であった。

開講日は金曜日の5限であり、週の最後の授業である。前日、木曜日5限には、体育・スポーツ系の学生と合同（約40名）で、身体表現、創作ダンスの授業が必修であった。

麻生による観察から、

- ①週の最後の授業なので、疲労していた。
- ②前日の身体表現、創作ダンスの授業で、体育・スポーツ系の学生の元気さに圧倒され、少々劣等感を持っており、その共感で、凝集力があつた。
- ③従って、この時間になると、反動的な発散行動と推察されるような激しい動きを突発的に始める学生が存在し、伝播する傾向があつた。

- ④村上¹²⁾による調査結果の通り、音楽、美術、身体表現をいずれかの分野を礎とする学生は、体育・スポーツ系の学生に比べて表現することにはためらいがなかった。
- ⑤授業開始当初から、自己の身体の重さや、筋肉の動き知覚する実習にも積極的であり、即興を「楽しい」と捉えていた。

IV 実習の過程

以降、2009年4月－7月までの実践記録である。写真は首藤による。^{註 8)} 実習の課題は、麻生の経験、並びに、C・V・W・ブルックス(1992)¹³⁾を参考とした。毎時、授業のはじめは2人組で1人脱力伏臥、他1人は伏臥している学生のマッサージをしあう。課題は「自分がして欲しいところをしてあげる」1人約10分。他者に対して脱力することを学ぶ。なお、以下各課程の学生の反応は、授業後半期の実習内省(学生メモ)^{註 9)}から集約したものである。**観察メモ**は、麻生等による観察記録である。

1. 自分の身体を感じ取る(自己を感じる)

(1) 課題①脱力：床に力を委ねる

ねらい：「身体は重い、特に頭は重い」を実感する。

課題提示：仰臥、全身脱力した状態で、最小限の力で頭、脚等の部位を持ち上げる。

学生メモ：頭は重い。脱力したら身体は動かせない。



写真 1. 脱力

観察メモ：全身脱力は困難で、少しでも他者が触れると、硬直する。実習を重ねるごとに、脱力とマッサージを心地よいと感じるようになった。

(2) 課題②脱力：床に力を委ね横転がり

ねらい：最小限の力を使って移動する＝横に転がる

課題提示：課題①から最小限の力で移動する方法を模索する。まずは人に転がしてもらおう。

次第に最小限の自力で転がる。

学生メモ：難しい。

観察：やりなれない事なので、つい周りを見てしまう。首を持ち上げるので全身が力む。脱力の感覚がわからなくなってしまう。これを繰り返しながら、脱力の感覚を体得した。

(3) 課題③脱力後ろ転がり

ねらい：最小限の力を使って多方向に移動する＝横前後に転がる

課題提示：課題②から最小限の力で多方向に移動する方法を模索する。

学生メモ：何をしているのだからよくわからない。後ろ転がりができない。

観察：まだ、余分な力が入る。あたる。自分がどうなっているのかわからない。



写真 2. 脱力横転がり



写真 3. 脱力多方向移動

(4) 課題④頭に集中：身体に集中

ねらい：頭部の感覚器官はどのような配置でどのように機能しているかを感じ取る。

課題提示：目と目の間、風の通るところ、耳と耳の間にあるもの、唇、耳、鼻の天辺等、頭部にある器官・機能を内観する。



写真 4. 頭に集中

学生メモ：風の通るところ、鼻、喉はわかった。皮膚も風を感じた。耳と耳の間には何があるか・・・難しかった。

観察メモ：閉眼でやや下向き、眉間に皺、瞑想の形相であった。不要な力を抜いて、内観できたと判断した。

(5) 課題⑤最大限の力を使い、ころがり、はねながら移動（フライパンの上のミミズ）

ねらい：最大限の力を使って多方向に早く移動する

課題提示：課題③から最大の力を使って全身で飛び上がり多方向に移動する。



写真 5. フライパンの上のミミズ

学生メモ：のたうち回るのは楽しい。空気破り^{註10)}ができないのは物足りないが、自分は、自由に動けるようになって楽しい。痛い。

観察メモ：身体を床にぶつけるような動きにはなれていないが、夢中であった。

2. 他者に触れる触れられたところを動かす（他者と触れ合う）

(6) 課題⑥ポイント：他者から知らされる自分の身体

ねらい：自分の身体的な制約を知り、人に触れ、触れられる感じを体験する。

課題提示：人差し指や数本指で他者の身体の部分を軽く押ししたりつまんだりすることをこの授業では「ポイント」と呼ぶこととした。ポイントをされる人は、閉眼でポイントの部位、ポイントで示される方向を解読してゆっくり動かし続ける。10ポイント程度を約3～5分間行い、役割を交替する。

学生メモ：人に指さしされてポーズをとるのははじめて。怖くはなかったが、不思議、とても楽。意外に気持ちよかった。いつもと違う身体を感じる。はじめは周りをうかがいながら、次第に自分の世界に入っていった。大きな、動きではないが、ただ座っているだけだけど身体の中身を動かすのは新鮮。次第に素直になれた。自分の身体じゃない。時間の流れがゆったりに感じる。ポイントの強さに応じた動きをするのが楽しい。



写真6. ポイント

観察メモ：ポイントうけるとる体勢は徐々にバランスを欠き、固有の癖が現れる。回を重ねるごとに、自ら進んで取り組むようになった。笑いや雑談もなく、極めて真摯な取り組みであった。自分の身体的な能力による動きの偏りが見られ、それを克服しようという思いはないようであった。

(7) 課題⑦人間粘土：ポイントと同じ要領だが、人間粘土は、ポイントをする人が四肢、胴体部の形を決め、粘土役はそのポーズをキープする。

ねらい：他者に依存すると自分では考えられない動きができることを知る。

課題提示：他者から指示されたとおりの姿勢をキープする。バランスが壊れたら、新たにやり直す、あるいは役割を交替する。



写真7. 人間粘土

学生メモ：人にされるがままって、気持ちいい。不得意な姿勢のキープはつらいので、ポイントをする人には、早く気がついてほしかった。

観察メモ：不要な力が抜けて気持ちよく動いているが、ポイント同様自分の自分の身体的な能力による動きの偏りが見られた。

(8) 課題⑧-1 人型なぞり，⑧-2 遠くの人型なぞり

ねらい：触れあいになれる

課題提示：人に触れるか触れないかのぎりぎりを掌や全身でなぞる。触れる相手がそばにいないでも、遠くの人、または、イメージした人型をなぞる。

学生メモ：相手との会話。壁をその瞬間だけでなくしてくれる。相手の体温を感じる。触れていないのに暖かい。遠くにいる人をなぞるのは面白い。どこで、何をされているのかわからないのが面白い。掌だけに偏ってしまった。相手を引き込むようになぞるのが面白かった。

観察メモ：触れる人、触れられる人、ともに背中に意識が通っていない。全身を使って人をなぞることはまだ、難しい。次第に速度が速くなり、座位は身体的な能力の限界に達している徴であることがわかった。



写真 8-1. 人型なぞり



写真 8-2. イメージして人型をなぞる

3. 他者に自分の身体を委ねる

(9) 課題⑨委ねる

ねらい：他者に自分の身体を委ねる。

課題提示：グループごとに1名を全員でかかえて運ぶ。交替で全員運ばれる。

学生メモ：はじめは恥ずかしかったが、勇気が必要。触れられると、自分は生きているという

妙な感じになる。暖かさ。存在を認めてもらえていると感じうれしかった。人に触れて動かすのが面白くなった。異性には抵抗があったが、触れることで逆に抵抗がなくなった。親近感、信頼性。ふわふわしている。身体がどうなっているのかわからない。

観察メモ：腹這いは、異性を問わず、触れる方も触れられる方も戸惑う。



写真 9. 計画して委ねる

(10) 課題⑩即興で委ねる

ねらい：自分の身体を即興的に他者に委ねる



写真 10. 即興で委ねる

課題提示：誰とでも全身を使って、委ねたり、委ねられたり、言葉を使用しないで続けられる。

学生メモ：信頼関係。決まった人とはやりやすい。

観察メモ：バランス感覚が整い、膝や腕の開きから見ても、相手の体重を全身で受け止められるようになった。全体の流れは良いが、座り込む相手を支えながら立ち上がる筋力や技巧が体得されていないので、断続的になってしまう。

4. パフォーマンス

(11) 課題⑩-1 パフォーマンス

ねらい：自由に即興を続ける

課題提示：何も計画を立てずに、これまで実習したこと、発声、空気破りの様々な方法等々、全体を考えながら、自己を見つめて続けてみよう。

学生メモ：複数の人とは、やはり安心する。ペアは狭いが、複数では開けた感じがする。ペアの方が丹念になぞれる。空気破りを待つのではなく、自分がしなくては。空気破りになる自信がなかった、悔しい。ポイントや人型なぞりの相手が次々に変わっていくのが面白い。空気破りのリーダーになれたのでうれしかった。誰かにぶつかりそうで怖い。やりたい放題だったけれど、相手と空気がびたつと合うと、とてもうれしい。皆で楽しんでいることがわかった。集団の中での自己表現は難しい。誰かが、自分のことをちゃんと触ってくれているのがよくわかる。その人の気持ちが伝わってくるのが心地よい。全体がひとつになって融け込むことが大



写真 11.パフォーマンス

切。様々な可能性を秘めたもの。ひとりでも楽しいが、叫んだときにちゃんと返事が返ってきて信頼感がアップした。皆でいると何でもできるし、叫べるし、楽しい。

観察メモ：即興は 15 分程度の予定であったが、1 時間弱続いた。継続性のぎこちなさは残っているが、全体を感じつつ、自分の身体に集中して即興を続けた。

(12) 課題⑩-2 パフォーマンス

ねらい：これまで実習してきたことを応用する

課題提示：これまで実習してきたことを皆で話し合い、大まかな計画をたてて実行する。

学生メモ：計画を立てるとやりたいことがやれなくなってしまう。計画したとおりのことができなくて悔しい。薄っぺらい。ビデオではきれいに見えたけれど、次に何をするかにとらわれすぎて面白くない。空気破りもできなかった。

観察メモ：見ていても計画が先行し、段取りでしかなかった。学生自らもそのことがわかっていて不満が残り、焦っていた。

(13) 物を用いたパフォーマンス（布遊び）

ねらい：全体のまとまりを欠くことによる学生の焦りを排除する。

課題提示：布（巾 1.8m 長さ 7m スパーリングジョーゼット）を使って即興をする。

学生のメモ：布は新鮮に感じた。暑かった。今までとは全く違う感じで面白かった。布は自由

に動かない。それまでのまとまりが崩れてしまった。これまでとは全く関係ない布が出てきて、これまでとの関連がわからなくなってしまった。



写真 12. 布遊び

観察メモ：布をなびかせたり、引っぱったり、写真 12 のように全員でかぶってモコモコ動くなど、仲間と布で遊んでいた。しかしながら、突然布を提示したことで、学生の意識が身体から布に移ってしまい、学生には一貫性を欠いた課題提示であったと反省した。

5. 見せ合い

(14) 課題⑩-3 見せあい

ねらい：見せ合うことで他グループの出来映えを知る。見せる側は緊張しパフォーマンスに集中するという榭来¹³⁾の調査結果を根拠とした。



写真 13. 見せあい

課題提示：生の演技を見ることで、伝わるもの、工夫すべきところを自分に置き換えて見る。

観察メモ：演技グループは群を作り、見る人から離れようとする傾向がある。見る側には視点を提示しているが、まだ見通すことはできない。巧妙なタイミングには拍手が起こった。

6. 全員による感想発表

(15) 課題⑫話しあい

ねらい：パフォーマンスの後、同感、類似、相違等を話し合い、自他の感じ方の確認をする。

課題提示：感じ方を発表しそれぞれの感じ方について自由に話し合う。フリートーキングができる雰囲気確保が重要である。



写真 14. 感想の話し合い

観察メモ：授業開始当初はフリートーキングができなかったので、順番を決めて感想を述べるよう指示をした。即興の実習を重ねるうちに緊張が解け、自由な話し合いができるようになった。

V 意識変容概観

指導過程における受講生の意識変容を以下のように、概観した。

1. 自分の身体を感じ取る（自己を感じる）

今までにない経験で不思議。これはダンスどのようにかかわるのかわからないが、心地よい。

2. 他者に触れられたところから動かす

触れ合いには少々抵抗があったが、触れられることで今までにない動きができて、あるいは他者のそれを見て、面白いと感じる。

3. 他者に自分の身体を委ねる

信頼関係が最も大切である事がわかる。

4. パフォーマンス

他者の存在が新しい動きへの刺激となって、群で戯れることが楽しいと思うようになった。日頃しない事を思い切ってやってみることは、自己発見につながる。雰囲気を変えよう、他者の心を動かす新しい何かをやってみようというところから「空気破り」の発見に至った。

5. 見せ合い

他者を見ることで、自己にのめり込んで見えない自分の姿を確認する。

6. 話し合い

感想の話し合いで、感じ方への共鳴が起こる。それは信頼関係と群の凝集性を高め、即興がより容易な環境へと変えていく。

VI おわりに

以上のような実習を通して、学生は、人に近づき、精神的には障壁を越えることができた。身体的な能力の向上が追いつかず、巧妙なコンタクトインプロヴィゼーションからは遠くはなれた所ではあるが、手をつないで踊ることが楽しいと思えるようになった。しかしながら、指導内容・方法はまだ未熟である。

なお今回は、芸術表現の経験者であることが、この授業を進めるに当たって有効に作用した。学校教育、社会教育で体育、ダンスの指導を担う、体育・スポーツ系の学生にも受け入れられるべく手だてが急務とされる。今後の課題としたい。

註

- 1) シンシア・J・ノヴァックは「コンタクト・インプロヴィゼーションは、互いに体重をかけあい、転がったり、途中で止まったり、一緒に崩れ落ちたりする。身体の勢いに無理に抵抗することはなく、むしろ勢いに身体をまかせているといった感じである。腕を使いあって支えることはあるが、決して相手の動作を無理に操作しようとはしない。・・・中略・・・さらに重要なのは、コンタクト・インプロヴィゼーションは動きを即興で作り出すということだ」²⁾と述べている。
- 2) 麻生は暗黒舞踏の創始者、土方巽による「生の概念」を具体的にメソッドとして具現化したワ

- ークショップを受講し、1988年11月大分県立芸術会館にて「芦川羊子と白桃房」による「糸宇夢」の公演とワークショップを開催した。
- 3) 麻生は大分県立芸術会館主催 田中浜演出による1998年ダンス・エクスペリエンスにオーディションを経て出演した。山梨県白州村にて10日間ワークショップ、大分での7日間の舞台稽古・本番を体験した。
 - 4) 受講したワークショップは、1985年から毎年、東京で8月に実施されたAmerican Dance Festival 夏期講座、1987年American Dance Festival six week school,DukeUniversity, Darham,USAにて受講したものである。
 - 5) 抱きしめること。特に欧米式の挨拶で抱き合うこと。広辞苑 第6版(2008)より。
 - 6) 大学生の教室の講義で隣の人を指先で「触れる」実験を行った。2人組、両人とも椅子に腰掛けた姿勢で、触れられる人は閉眼、触れる人は人差し指で肩から上とした。10分程度の試みであった。2009年7月13日月曜日4限大分大学教育福祉科学部情報社会文化課程2年生を対象とした現代芸術事情46名に対して実施した。
 - 7) 2008年、知的障がい者と大学生のダンス交流会は、知的障がい者70名、大学生30名の団体として第63回国民体育大会 チャレンジ!大分国体、第8回全国障がい者スポーツ大会 チャレンジ!大分大会の開会式 式典演技の第3シーンの中央に位置して、難度の高いダンス演技を上演した。しかし、この実習過程においても、知的障がい者に対する大学生以外の健常者の姿勢は柔軟ではなかった。障がい者を差別してはいけないという理解は出来ているが、どのように接していいのかわからない、認識不足等々で、号泣する健常者も出現した。実習過程において健常者の知的障がい者に対する認識は、友好的に変容したが、知的障がい者の現状やなぜ障害者であると区別されるのかなどの知識を得たいという意欲にはつながらなかった。
 - 8) 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修2年生、自らもこの授業の経験者であり、本研究では、ビデオ記録を担当した。
 - 9) 学生は、授業前半には、実習課題への戸惑いがあったが、後半になると客観的な内省が出来る能力を体得したと観察された。質問紙による課題に対する感想の自由記述による内省報告を元に考察した。
 - 10) その場の雰囲気を変えようとする。この実習過程で、学生が見出した行為と、それを表す学生による造語である。

参考文献

- 1) 村上智美(2008)表現運動学習時における「恥ずかしさ」について 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修 修士論文 pp.14-16.
- 2) シンシア・J・ノヴァック(2000) 立木輝子・菊池淳子 訳 コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体 フィルムアート社 pp.15-16.
- 3) 原田広美(2004) 舞踏(BUTTOH) 大全 現代書館 pp.18-75.
- 4) C・V・W・ブルックス(1992) 伊東 博 訳 センサリー・アウェアネス 誠信書房 pp.304.
- 5) 伊東博(1991) ニュー・カウンセリング 誠信書房 p.319.
- 6) セイモア・フィッシャー(1980) 村山久美子・小松 啓 訳 からだの意識 誠信書房 p.56-58.
- 7) セイモア・フィッシャー(1980) 村山久美子・小松 啓 訳 pp.93-126.
- 8) 麻生和江,小西寛之,首藤小和(2008) 2008年おおい国体・おおい大会の式典演技における出演者の知的障がい者に対する認識について 第28回全国創作舞踊研究発表会 口頭発表抄録 舞踊教育学研究 第11号 pp36-37. 2009.8
- 9) 伊東博(1991) p.320.
- 10) シンシア・J・ノヴァック(2000) p.193.
- 11) 市川雅・國吉和子編(2000) 見ることの距離ーダンスの軌跡 1966~1996 新書館 pp.56-57, 171-175.
- 12) 村上智美(2008) pp.12

- 13) C・V・W・ブルックス (1992) 伊東 博 訳 pp.296.
- 14) 櫛来祥 (200) 創作ダンス学習時における「みること」「みられること」という経験が学習者にもたらす影響 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修 修士論文 pp.59.

The Practice of "Body Touching Each Other" in Dance Class — A Report on the Body-Expression Class —

Aso,K., MURAMAMI,T., KUSIKU,S., KONISHI,H. and SHUTO,S.

Abstract

The purpose of this study is to report on the process and results of guidance given to undergraduates who major in artistic expression on practices related to the first steps in contact improvisation, named "Body Touching Each Other." Contact improvisation is the core of post-modern dance and is necessary for dance creation. The undergraduates finished the first stage of contact improvisation, and grasped its fundamental importance through the systematic method which we employed.

【Key words】 improvisation, post-modern dance